

# ハンドボール競技のゲーム分析

## —0-6DFに対するポストプレーヤーの特性に着目して—

### Game Analysis of a Handball Game: Its Attention is Paid to the Characteristic of the Post Play to 0-6 Defense

キーワード：ゲーム分析・ポストプレー

八尾 泰寛

#### 1. はじめに

ハンドボール競技の攻撃におけるポジショニングは、レフトウイング(LW)・レフトバック(LB)・センターバック(CB)・ライトバック(RB)・ライトウイング(RW)・ポスト(PV)に位置するセンタースリーの形とポストを2人おく、ダブルポストの布陣が基本である。

両ウイング(LW・RW)はサイドプレーヤーとも呼ばれ、速攻での素早い飛び出し、セットオフエンス(以下、遅攻)時には、ゴールライン際の角度のない位置からのシュートテクニックが求められる。基本的には、コートのコーナーに位置し、受け身のポジショニングとなる。バックプレーヤー(LB・CB・RB)は、ゴールから約10m以上の距離に位置し、攻撃の中心的役割を担うプレーヤーで得点能力、フェイント能力、アシストプレーの視野と判断力が求められる。ポストプレーヤーは、防御の間にポジショニングし、ボールを持たない状況での動きやゴールライン際でのコンタクトプレーで負けない強さ求められる。ウイングプレーヤー同様に、受け身のポジショニングではあるが、見方を向きながらのポジションとなることで、第2のゲームメーカーとしての役割が期待されている<sup>1)</sup>。

攻撃の狙いは、いかに得点するかどうかであり、試合の主導権をにぎり、相手チームがボールを支配することがないような方法で、攻撃局面の組み立てに着手する。ボール獲得からの速攻戦術の目的は、ウ

イング、ポストプレーヤーの先行プレーヤーの素早いスタートからバックプレーヤーを含めた集団戦術を用いる攻撃活動が行われる。

遅攻では、お互いに協力し、相手防御システムに対抗する集団戦術により相手ゴールへ接近し、得点のための好ましい状況を築きあげようとする。それは、ボール保持者を中心とし、2人またはそれ以上のプレーヤーが相互に協力し合い、複数の選手で攻撃を行うコンビネーションプレーを形成する。コンビネーションプレーの基礎は、個人的行為の戦術プレーにより、防御に対し2対1の数的優位な状況を獲得することが目的としてあげられる<sup>2)</sup>。

攻撃プレーヤーは、相手チームによって用いられた防御に対する相手の位置や活動に対し、パスの動作にあわせ、コート内を変化のあるランニングやフェイント動作を駆使し、得点確率の高いゴールエリアライン上に位置するポストプレーヤー、両サイドに位置するウイングプレーヤーを自由にする。いわゆるゴールエリアライン付近での攻撃側に有利な数的優位関係を作り出すことで防御間が広がる。そのため、相手防御に対し、攻撃プレーヤーは、味方プレーヤーとの対応動作間における集団的行為が必要となる。この際、防御間にポジショニングするポストプレーヤーのボールを持たない状況での動き、ゴールライン際でのコンタクトプレーはスコアに記録されることが少なく、その要因を検証することで、局面ごとの戦術選択、攻撃の中心となるバックプレー

ヤーの判断、決断力を高める能力と技能を発達させると考えられる。

そこで、本研究では関東大学女子の試合から、ゴールエリアライン上付近に6名の防御者が一線に立ち並び、防御間を狭くする0-6防御法に対するポストプレーヤーに着目し、セットオフENS時の集団戦術における動きの有効性を観察することによって、攻撃の最終局面にどのように関与しているのかを調査し、今後の一資料とすることを目的とした。

## 2. 方法

平成25年関東学生春季・秋季リーグ戦における6試合を分析の対象とした。対象とした試合の防御方法は、両チーム共にゴールエリアライン上付近に6名の防御者が一線に立ち並び、防御間を狭くする、0-6防御の試合を選択した。

分析には、デジタルVIRカメラをコートサイドの中央に固定し、コート全体を撮影した。

データの記録は、試合のビデオ映像よりアタックエリアを30度ごとの6つのエリアに分割した記録用紙(図1)に、ポストプレーヤーの最初のポジショニング位置、シングルポスト時の空間移動、ブロック

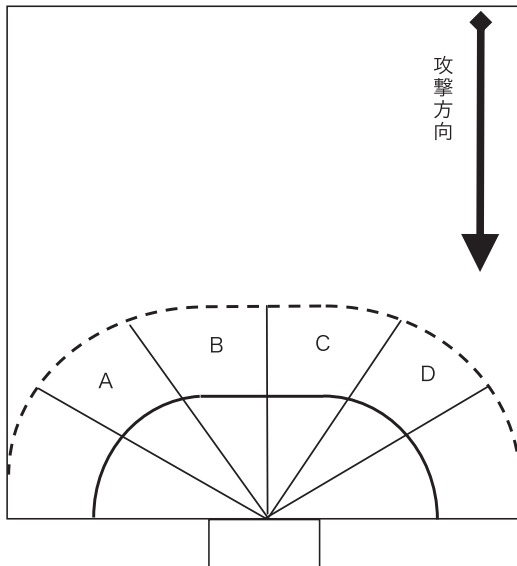


図1 分析コート図

プレー、ダブルポスト時の移動、ブロックプレーのポジショニングパターンを集計した。そして、集団戦術の動きの有効性、成功要因について分析を行った。

## 3. 結果および考察

ポストプレーヤーの攻撃参加時におけるバックプレーヤーの攻撃割合(図2)は、防御を前にゴールキーパーまでの距離があるロングシュート33.0%、ミドルシュート16.0%、ステップシュート5.3%、各種フェイントやステップワークを利用しながら防御間をすり抜け、ゴールエリア付近からのカットインシュートは23.0%、ポストパス22.7%であった。攻撃の中心的役割を担うバックプレーヤーは、絶えずシュートを狙うことが重要で、防御を前にした状況から約8割がシュートにて攻撃を完了している。防御に対し、シュート、フェイント、ランニング動作による複数の動作技術を取り入れたポストパスは約2割であった。ポストプレーヤーは、防御間にポジショニングし、ボールを持たない状況での動きやゴールライン際でのコンタクトプレーが求められ、バックプレーヤーとのコンビネーションを多くすることは、ゴールエリア付近からの近距離シュートとなることで、防御側に規則違反が起こりやすく、罰則が与えられる状況にあること。成功率からみても各種フェイント動作、ランニング動作からのカットインプレーは約6割、ポストプレーは約4割と高いことから、少人数におけるグループ戦術が必要であると考えられる。

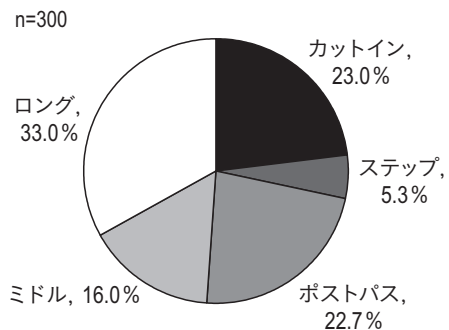


図2 ポストプレーヤーが絡んだ全体の攻撃割合

防御間に位置するポストプレーヤーにおける攻撃成功率(図3)では、防御間にポスト1人のロング43.6%、ミドル26.3%、ポストパス40.4%、ステップ41.7%、カットイン60.3%であった。防御間にポスト2人のロング36.4%、ミドル30.0%、ポストパス54.5%、ステップ50.0%、カットイン54.5%であった。防御間に位置するポストプレーヤーの人数比較では、ダブル時のポストパスは5割を超え、シングル時の攻撃割合のポストパスは83.8%と高く、バックプレーヤーとのコンビネーションプレーから複数の条件を作る戦術が行われ、有効な攻撃戦術であることが示され、ボールに対し防御を寄せ集めることでミドル・カットインプレーにつながり攻撃の幅が広がることが示唆された。

遅攻時のポストプレーヤーの位置および動き(図4)では、ポストプレーヤーのポジショニング位置Aエリア8.0%、Bエリア43.3%、Cエリア37.0%、Dエリア11.7%で全体の8割がコート中央であった。ま

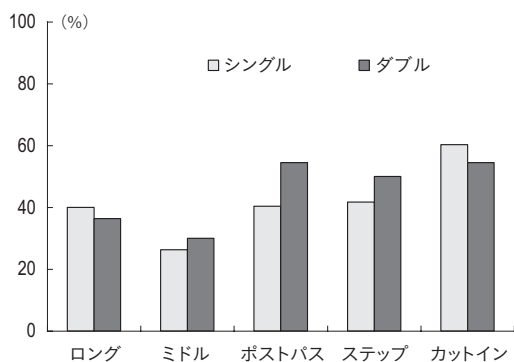


図3 シングル・ダブルポスト攻撃時の成功率

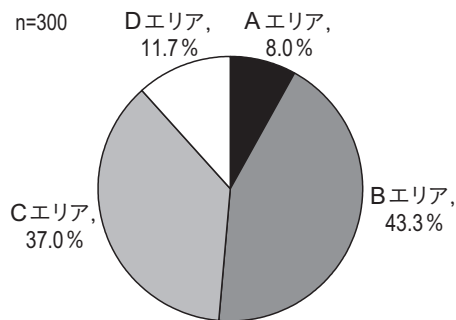


図4 セットオフense時のポスト位置

た、ポジショニングから移動ポストプレーはAエリア5.3%、Bエリア24.0%、Cエリア37.0%、Dエリア11.7%であった。攻撃の中心的役割を担うバックプレーヤーの中でもセンターバックはゲームコントロールいわゆるチームの司令塔とも言われ、コート中央にポジショニングすることからポストプレーヤーがゴール付近に位置しチーム攻撃戦術が展開されている。チーム攻撃戦術の基本として防御形態を崩す戦術と試合ごとの対戦相手の防御システムを研究し、その弱点を積極的に狙う戦術があげられるが、結果から基本的な共同プレーは、センターバックとポストプレーヤーから成り立っており、ポストプレーヤーが中央に位置することで防御形態は中央付近に集まり、バックプレーヤーの早いパス回しやコート内を変化のあるランニング、フェイント動作により、左右のスペースに移動しやすく、約6割移動プレーに繋がっている。ポストプレーヤーが移動することで、防御体型が広がり、バックプレーヤーの攻撃スペースが広がることで、防御形態を崩しやすく、アウトサイドの空間的スペースを利用した攻撃戦術が行えやすいたことが伺える。

遅攻時のシングルポストプレーヤーの攻撃パターンにおける成功率(図5)では、Aエリアからの移動ポスト46.2%、Bエリア59.5%、Cエリア34.8%、Dエリア60.0%で、Aエリアでのブロック75.0%、Bエリア32.7%、Cエリア38.7%、Dエリア55.6%であった。ポストプレーヤーの移動は、ボール保持状態および非保持状態での個人戦術である。そのため、防御者の前方もしくは後方に走り込むポジション移動や

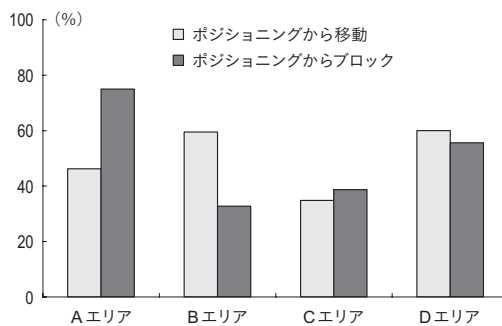


図5 シングルポストの攻撃パターンにおける成功率

ブロックプレーにより、防御を引きつける、マークを外すことで味方を優位な状況にする支援プレーや相手防御形態を崩すための味方プレーヤーとの対応動作である。このことで、その局面、その部分での数的優位関係が出現することが可能であることが伺え、コンビネーションプレーやグループ戦術には、重要な役割があると考えられる。

ダブルポスト攻撃のパターンにおける成功率(図6)では、防御の前後・左右の空間を利用する2人移動の成功率は28.0%、1人移動/1人ブロック58.3%、2人ブロック26.3%であった。1人移動/1人ブロックの攻撃は約6割の成功率をあげていることで、ゴールエリア付近の防御間をポストプレーヤーが、前後・左右の防御間へ移動し、バックプレーヤー、ウイングプレーヤーの対応動作、また、バックプレーヤー、ウイングプレーヤーの防御間の攻撃により、ポストプレーヤーの空間移動、防御間が広がることで、防御をブロックすることが可能となることが伺える。このことで、ポストプレーヤーを絡めた2人から3人のコンビネーションプレーは、防御体型のマークミスがおき、数的優位な条件が作りやすいこと。防御のマークから外れることで、バックプレーヤーのシュートチャンスが増えることが伺える。2人移動・2人ブロックのパターンは、ゴールエリアライン付近を前後・左右に動き回り、中央4人の防御プレーヤーが、2人のポストプレーヤーに引きつけられ、アウトサイドでの数的優位やポストシュートやバックプレーヤーの個人技術により攻撃が完了していると思われる。

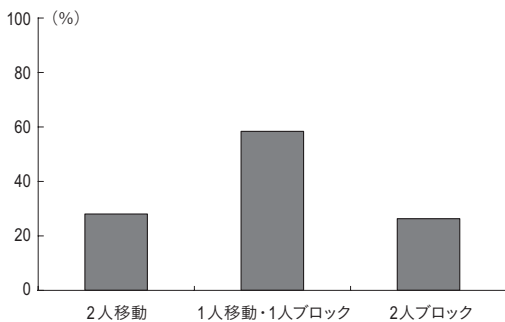


図6 ダブルポストの攻撃パターンにおける攻撃成功率

#### 4. まとめ

本研究では関東大学女子の試合から0-6防御時のポストプレーヤーに着目し、遅攻時における集団戦術の動きの有効性を観察することによって、攻撃の最終局面にどのように関与しているのかを検討した。結果として以下のような所見を得た。

- (1) ポストプレーヤーとバックプレーヤーのコンビネーションプレーは複数の条件を作りやすく、有効な攻撃戦術であることが示された。
- (2) ポストプレーヤーの移動戦術は、防御を引きつけることで、ミドル・カットインプレーが優位な状況になる。  
従って、防御の間からのミドルシュート技術力と防御の間を割って入る技術とシュート力の必要性が示された。
- (3) ポストプレーヤーの移動は防御形態が広がることで、攻撃の中心となるバックプレーヤーの攻撃が行いやすくなり、アウトサイドの空間的スペースを利用しやすくなる。
- (4) 防御者の前方もしくは後方に走り込み、防御間への移動やブロックプレーは、味方を優位な状況にする支援プレーであり、相手防御形態を崩すための味方プレーヤーとの対応動作により数的優位関係が出現することが可能である。
- (5) ダブルポスト時のポストプレーヤーを絡めたコンビネーションは、各プレーヤーが局面ごとに役割を果たすことでグループ戦術の目的を達成する。

#### 引用・参考文献

1. 酒巻清治(2007). 確実に上達するハンドボール. pp. 86-91.
2. ヨアン・クスト=ゲルマネクス(1981). ハンドボールの技術と戦術. pp. 26-229.
3. 荒川清美監修(1980). ハンドボール新訂版. pp. 87-88.
4. (財)日本ハンドボール協会編(1992). 日本ハン

ドボール指導教本. pp. 91-97.

5. 八尾泰寛(2013). 東京女子体育大学紀要第48号. pp. 81-85.
6. 山下純平(2010). 九州共立大学スポーツ学部研究紀要第4号. pp. 61-64.